優秀賞

踊りと共に歩む

青森県十和田市立甲東中学校
三年　小村　帆乃香



踊りでたくさんの人に感動を与え、笑顔を届けること、それが私の夢です。

私の母は、日本舞踊教室の二代目家元です。私も、そして、姉も二人の弟も物心ついたころから踊っていました。公演や興行の依頼があれば、県内はもちろん、県外まで出向き、舞台に立っていました。

今は亡き初代家元である祖母は、「踊って楽しく、見て楽しい」を目標に舞台に立っていたそうです。二代目の母は初代家元の思いに、「見る人に夢、希望、笑顔を届ける」という思いを加え、活動の場を広げてきました。私は、そんな初代、二代目の姿を見て育ちました。私はなんのためらいもなく、ごく自然に私の体に心にその思いを植え付けられてきたように思います。

三歳から始めた踊り。幼い頃は、「かわいいね。」「きれいだね。」そう言ってもらえるのがうれしくて踊っていたように思います。しかし、今では、踊りは私の生活の一部、なくてはならないものとなっています。こんな気持ちになったのは、二つの大きな出来事があったからです。

十歳の冬のことです。ある舞台で、私は寒さに震え、お腹を空かせた貧乏な家の子どもの役を演じることになりました。私は、寒さと空腹に必死で耐える様子を上手く演じることができず、何度も何度もやり直しをさせられました。業を煮やしたのか、母は、急に、「ほのか、裸足で外を歩いてきなさい。」と厳しい口調で私を怒鳴りつけ、雪の降る戸外に追い出してしまいました。私は、冷たい雪の上を裸足で歩きました。凍える足で思うように歩くことができません。冷たさで足の感覚がありません。悔しくて、辛くて涙が止まりませんでした。しばらくして、私はやっと家の中に入れてもらうことができました。すると母は、「今、外を歩いてきた気持ちをそのまま踊りで表現しなさい。」と諭すように言ってきました。それからの私は、雪道を歩いた自分の足の感覚を心に焼き付け練習に励みました。本番では、母の言葉を演技にかえて踊りました。「とても上手だったよ。」とお客様に言われた私は、母への感謝の気持ちで一杯でした。後で、姉から聞かされたことですが、私を裸足で戸外に出したとき、母は、「辛くても今ほのかに教えなければ。」と涙をこらえていたそうです。私は、母の踊りに対する強い思いを改めて知り、母の厳しさは踊りを大切にする心の表れなのだと思いました。そして、もっともっと上手になりたいと思い、これまで以上に練習に力を入れるようになりました。

そしてもう一つの出来事は、今年三月、日本列島を震撼させた「東日本大震災」です。毎年私たちは、三陸地方を訪れ、舞台に立って踊っています。今年ももちろん何ヵ所からか依頼を受けていました。しかし、あの震災で全てが一瞬にして流されてしまいました。楽しみにしていた舞台、また、三陸の人たちに感動と笑顔を届けられると一生懸命練習していたのに、私は残念で残念で仕方ありませんでした。ところが、六月になると、ある方から「被災地の岩手県黒崎海岸に住む人たちを何とか勇気づけたいので、踊りに来てくれませんか。」という依頼を受けました。母は「私たちでお役に立つのなら。是非行かせて下さい。」と大喜びで返事をしました。公演は平日だったので、最初私はメンバーに入れてはもらえませんでした。しかし、私は「自分の踊りでどうしてもみんなを元気にしたい。」そう強く思い、両親や先生に自分の思いを必死で伝えました。すると、そのひたすらな思いが通じ、私も一緒に連れていってもらえることになりました。公演当日、黒崎海岸までの道中、その無残な姿は人の心までも奪ってしまっていて、私が踊り始めても場内は、シーンと暗く静まりかえったままでした。そこで私はいつも以上の笑顔で、一人ひとりに笑顔が届くように踊りました。すると、どこからともなく手拍子の音が、笑い声が聞こえだし、それが少しずつ広がり、最後にはみんなが立ち上がり、会場一杯に笑い声が響きわたりました。私は、みんなに、希望や夢を与えることができたと確信することができ、踊ることが私の使命だ、とさえ思えました。

母は、「いい踊りを踊るために、自分の思いを踊りで伝えるためには知識と知恵と経験が必要だ。自分の引き出しをたくさんの知恵や知識で一杯にしなければいい踊り手にならない。」と言います。

中学卒業後は、本格的に力を入れて踊りに取り組みたいと思っています。もちろん高校への進学も希望しています。両立することはとても大変なことだと思います。でも、私は負けません。踊りを楽しみにしているお客様の笑顔が私を待っているから。